

幕末に於ける支那經略論の發展とその性質 (下)

向 居 淳 郎

三

さきに述べたところは幕末に於ける支那經略論の發展を略々年代順に跡づけつゝ、主要なる論策の梗概を示さんとしたものであつた。次には之等の論を總體的に觀察するとき、如何なる性質があるかを考察してみたい。

思ふに之等の支那經略論は如何なる環境の下に生れ出たか、翻つて之を國際關係の上から考へてみるに、それは西洋諸勢力の東洋侵犯の形勢の裡に發育したものであること争ふべくもない。中でも英露兩勢力の侵犯を我が國識者が覺知した時、早くこれが對抗策として、北海、南洋方面の經略論が生れたが、支那經略の論はまたその精神の繼承發展に外ならぬのであつた。支那經略論が多くの場合、その經略の對象を單に支那大陸のみに限らないで、北海或は南洋の方面をも含めてゐたのはこれがためである。それ故支那經略論もまたさきの北海南洋の經略論と同じく、西洋諸國の侵略的勢力に對する對抗的性質を帯びて來るもので、それはたゞ支那大陸への單なる進取膨脹を意味するものではなかつた。その對抗とは自らの國土を防衛し、國家を維持する所以のものである。従つて外への進取經略は同時に

國の内を守るものであり、支那經略はとりも直さず我が國防的意味を寓するとせられる。

かの佐藤信淵の宇内混同秘策の如き、これのみを見ればたゞ恣意なる侵略主義の發揮とも考へられるけれども、しかしその著作に先立つて防海策の著述のある事よりすれば、宇内の混同は海防策の反面であり、これと相表裏すると云ふべきである。それは信淵の思想を全體的なものとして見るとき斯く云ひ得ると思ふ。又吉田松陰が進取經略を論ずるに當つて、「鑿蝦夷、收琉球、取朝鮮、拉滿洲、壓支那、臨印度、以張進取之勢、以固退守之基」と云つてゐるのも進取の勢と退守の基とが共同の地盤に於て成立すること、換言すれば積極進取策がそのまま國防的性格をもち得ることを強調したものに外ならぬ。

なほ森祐信が滿清の攻略を論じた場合には、「攻外救内之術」を標榜してゐるが、こゝにも同様の趣旨を看取することが出來やう。即ち祐信の説明によれば「我既據滿清之地、以虎視滄海、犄角之勢已成、虜安能窺我邊陲、是攻外救内之術也」であつて、滿清への進取經略は西洋諸國の我が邊陲覬覦の念を絶ち得べく、従つて我が國防上の安全性を齎すとするものである。

或は山田方谷が進督學に與へた書信に於て外略即内守の論を立てゝゐるのも、同じく外略によつて歐米列強の侵略に對抗せんとする國防的意味を寓してゐるらしい。之等の論者に於ては何れも兵法的な言葉が好んで使はれてゐるが、それだけに共通的な雰囲気がよく味はれるのである。

斯様にして幕末に於ける支那經略論は國際政局の變動に對處して、我が國防上の理由から提唱せられたもので、そ

これは西洋諸國の東洋經略とは自ら行き方を異にするものであつた。そこには確かに我が國独自の立場が存在すると思ふ。

しかし斯様に支那經略論の性質を考へるに當つて、なほ見逃してならぬものは國內政治問題との關係である。然らばそれは如何なる關聯を持つか。凡そ國內の政治に一大變革の起る前後、外部に對して遠略思想の生れる傾向のある事は歴史が往々にして之を證明してゐるが、幕末時代に於ても、時代の不安動搖が識者をして支那經略の雄志を恣にせしめた傾向あるを免れない。従つて斯かる遠略論は國內政治の改革を要求し、又國內政治問題解決のために、この種遠略論の發生した觀があるのである。遠略思想と國內政治の問題は根本的には斯く密接不可分の關係に立つと云つてよい。

その事は各個人の思想内容について見ても、佐藤信淵の「宇内混同秘策」には「將に飄外に事有んとするには、先づ能く内地を經綸すべし」と稱して、國內政治組織の一大變革が考慮されてゐるのは人のよく知る所であらう。つまり信淵の云ふ進取經略は國內政治の改革と彼比照應して實現さるべきものであつて、内治をそのまゝにして外征を説いたのではなかつた。

又眞木和泉守が滿清其他の經略を説いた時も、「國威四方に輝可申とならば禮樂征伐天子より出に無之候ては名正しく言順なる事出來不申」と云つて國體の闡明に基く政治の改革が主張されてゐる。勿論國內政治の改革を如何に方向付けるべきかに就ては信淵と和泉守とでは、必ずしも一致しないが、内政改革の必要を説く點に於ては確かに共通の

ものが存するわけである。

これに對して森祐信や山田方谷の説く所はまたそれとやゝ趣を異にするであらう。即ち信淵等の説が國外經略のために内政改革を重要視してゐるのに對して、祐信や方谷の云ふ所は國內の紛擾、憂患を他に轉せんがために遠略を論じた傾向がないではない。祐信の云ふ攻外救内の術は前には進取と共に國防的意味を含んでゐることを云つたが、なほ深く考へるとき、これには國內の紛擾轉換の意圖ある事が認められる。と云ふわけは徹屢論に「臣謹察天下之形勢、方今之勢有懼外患而釀內憂之弊、外患之可懼固也然內憂之可懼又出外患之表」といひ「故臣以謂舉天下之內憂而移之於滿清、以張犄角之勢、內外牽制、絕虜鐵路、今虜已據清而我攻清、彼能棄清以攻我乎、如臣之說內憂外患併去所謂一舉而兩得者也」と説明してゐるからである。その意味を敷衍して云ふなれば、外交問題を繞つて釀し出された國論の對立に基く國內の紛擾を滿清の經略によつて解決し、併せて外國の我が國覬覦の念を絶たんとするものであらう。即ち祐信の説く滿清の經略は列強の侵略に對して國土防衛の意味を有つと共に、なほ國內紛擾の解決が考慮せられてゐた。

更に山田方谷にあつては、その外略即内守の論は前述の如き國防的意味もさること乍ら、國內問題の解決がその外略策の裡に隠されてゐる事を見逃してはならぬ。例の進督學に與へた手簡によれば方谷は云ふ、「此上之一策ハ内守ハ逆モ不相成外略之外無之ト存候、外略即内守之爲ニ候間、可略地方我藩屏ト相成候國相擇略取可致事ニ候」と。而してその外略は「公邊にては内守さへ御六ヶ敷折柄迎茂御及兼之事と奉存候間、此節扼腕思戰候水戸越前兩肥長州等之大

藩諸方江致手分切取可申、」さすれば「兼而奮激抗言致候藩の事故其命下り候を辭候事は有之間敷候間」今日の大策此外にはなく、この好機會を逸しては「右諸藩も又々はづみ抜け候而日本國中たはいも無之事ニ相成可申」と痛心する。思ふに斯かる論の説かれた頃は幕威の衰勢甚だしくして、雄藩の擡頭をまさしくと見る時期、この時に當り方谷の外略即内守の論は國威伸張と共に雄藩の勢力を外略によつて銷磨せしめ、以て倒れ行かんとする幕府の保持を圖らんとする所に主要な意味があつたのであらう。方谷の藩主板倉勝靜は幕末多難の際に於て寺社奉行或は老中に歴任し、從つて方谷は藩公の顧問として幕府の中樞に通じてゐたものであるだけに、斯かる幕府擁護の思想を生んだのは當然と云はねばならぬ。これを以て見れば方谷の論は純粹な遠略論と云ふよりは政治的考慮が多分に含まれてあり、國內政治問題の解決と云ふ立場が鮮かに見られるわけである。

支那經略論の發生は右の如く國防上の理由、國內政治問題解決と云ふ點に根據を有する外、なほ之を一般思想との關聯に於て考察する時には、世界的智識の進展に負ふと共にまた歴史の反省、歴史的精神によつて鼓吹せられた點も見落すわけにはゆかない。佐藤信淵の宇内混同祕策、また眞木和泉守の經緯愚説が遠略を論ずるに當つて我が古典の思想、肇國の精神を論據としてゐるのはその最も著しいものであらう。斯くの如く遠略の思想が歴史の精神と結び付き、永い歴史の上に自らの地位を見出さんとして來る事はこの種の思想が西洋諸國の侵略政策の模倣、そのまゝの逆用とならないで、我が國獨自の特色を形作る上に意義深いものである。

しかし乍ら幕末に於ける支那經略論を通じて考へる時、國防的また政治的意味に於ては随分強調されてゐるが、經

濟的の方面に就ては殆んど閑却されてゐた觀がないではない。彼の佐藤信淵は有名な經濟學者であるが、その説く進取經略論は北海南洋方面の經略の場合には武力と共に貿易植民の主義によるべき事を云つてゐるけれども、宇内混同秘策に於て支那經略を説いた場合にはその經略が經濟上如何なる意義を有するかと云ふ點について殆んど語る所がない。たゞ混同秘策に於て「今世に當て萬國の中に於て土地最も廣大に、物産最も豐饒、兵威最も強盛なる者を撰ぶときは支那國に如くものあらんや」と説くけれども、その廣大豐饒な土地物産に對して、日支間の經濟關係を如何に依存せしめるかについては何等觸れてゐないのである。況んや信淵以外の論者からは經濟的論據を見出す事殆んど困難であつて、論述の比較的詳細な森祐信の滿清經略論にしても、それには兵學家としての識見は強く出てゐるが、貿易植民等經濟的な方面は全く見出す事が出来ない。

然るにこゝにひとり山田方谷だけは例外に屬してゐる。尤もこの山田方谷も安政六年或は文久元年頃に支那經略を論じた際には未だ經濟方面に就て注意してゐないが、しかし慶應元年の頃と思はれる上書にはこの邊の注意が明らかに躍出してゐる。即ちその上書には、

海外何方に而も、一兩國御妙策を以て早々御屬國と被成、貢賦本邦兩三國分斗も新に納り候様可被成、附屬不仕に於而は、早速兵力を以御伐取之事。右者不容易事に被存候得共、航海交商よりは利益も即時に有之候儀、尙又此位の御大策に無御座候而は交易之利益は終に得られ申間敷候、西洋諸國今日盛に致通商候國々何れも兵力を不用は無之候、此段篤と御承知無御座候ては御交易も終には大害に相成可申候。(方谷先生年譜)

と云ふ。本邦の屬國とすべき一兩國とは方谷の考では朝鮮滿洲臺灣邊を指すのであらうが、之が經略は我が國財政的見地よりして必要であると説くわけである。方谷が慶應三年に上書した時、支那北京に使節を遣はして清國と滿洲交易の條約を結び、諸かざる場合には直に滿洲に攻め入らんと云つたのも同じく海外經略の經濟的論據を考へしめるものである。斯くして方谷が財政經濟的理由を取り出して來たのは支那經略論が性質上の發展を遂げた事を物語るであらう。

しかしそれにしても幕末時代に於ける支那經略論は一般的に論ずるなれば、經濟的説明を十分にしたものが殆んどないと云つてよい。蓋し西洋近代の帝國主義は經濟的性質に富む事に於て特徴をなすが、幕末に於ける支那經略論には經濟的理由は強く説かれないうで、寧ろ國防的方面が強調される風があつたのである。その經濟的性格の乏しい點に於て幕末に於ける支那經略論はまた一つの特色を有すると云つてよい。

四

支那經略論の性質についてなほ考へるなれば、その經略には如何なる方策が考慮せられたかを見ても或種の特徴が抜き出されるであらう。その經略の方法に就ては、佐藤信淵、森祐信、山田方谷からは何等か纏つた見解を聞く事が出来る。中でも佐藤信淵の説く所は遠征軍の編制、經略の順序等詳細を極めてゐるが、これに就いてはさきにも觸れた點があるからこゝでは省略に附したい。たゞ信淵の考ふる所の遠征軍の組織が空想的な新軍制を考案してゐる點だ

け注意して置けばよからう。これに對して山田方谷が説く所の遠征軍は舊來のまゝの藩を基礎とした飽迄も具體的のものである。即ち方谷の説いた文久元年の清國攻入の建議には派遣軍を左右中の三軍に分つて各々二三の強藩を以て一軍を構成せしめ、幕府はたゞ軍監を派遣すれば事足りるとしてゐる。これはさきの信淵の空想的な經略論よりは具體的なものに近付いてゐると云へるかも知れない。而して經略地の處分について方谷の説く所は一部を幕府の直轄として奉行を任命する外、他は悉く遠征諸藩の支配に任さんとするものであつた。即ち我が封建的政治組織をそのまま支那に延長せんとする態度であつて、それは歴史を溯つては豊太閤の支那問題處理方針にも類似するであらう。

しかし方谷の説く支那經略の方法は封建的武力に依存するけれども徒に武斷主義を強行するものではなかつた。前記文久元年の清國攻入の建議には經略地の處分方法を説いた次に「其外殺伐を不好、安撫を主とし、唐國古代之風俗に復候御政令を御施被成候はゞ人心歸服仕、多分兵力を不用で降伏可仕と奉存候」と云つてゐる。これは武略を主にするよりは文治政策を説いたものに外ならぬ。か様な事はすでに佐藤信淵にも表れてゐる所であつて、宇内混同秘策には支那江南地方の占領後は「周く天下に徼し新附の支那人を憐み、其材あるものは悉く之を選用して官にあらしめ、且つ又明室の子孫たる朱氏を立て上公に封じ、其先祖の祭祀を祇敬せしめ大に慈徳を施して篤く支那人を撫育すべし」と云つてゐるのは文治主義を説くものとして意義深きを覺える。而も斯かる態度は更に森祐信の論に於て鮮明なるものを見るであらう。祐信の論は滿清の經略には「仁義之師」「仁恤之師」を以て臨むべきを強くも説くのであつた。即ち云ふ

苟我以仁義之師臨之、號令嚴肅、不侵秋毫、舉人材於敵國救萬民於水火、彼苦滿清之苛政、害英夷之剝掠、豈有
錮食壘壁以不迎我者歟（中略）明之所謂倭寇者我不逞之徒也、不逞之徒猶且燧明之命脈、況吾仁恤之師、

つまりその云ふ仁義の師とは相手を剷滅し、壓制するのではなくして、相手を生かし救済する意味である。そこには
道義的精神とも云ふべきものが嚴存してゐる事を認めねばならぬ。

斯様にして支那經略論に於て文治政策が説かれ、道義的精神が強調される事はこの種論說の性質を考へる上に於て
極めて重要な意味を有つものであらう。蓋し從來北海南洋方面を對象とする進取經略が論ぜられた場合には、本多利
明等によつて代表される如く西洋流の植民政策が論ぜられたけれども、斯くの如き文治的、道義的な方略とも云ふべ
きものは未だ見る事が出来なかつた。勿論北海南洋の地方が未開の地域であるのに對して支那は文化國であり、假令
之を經略しても生かさるべき人材、救済さるべき人民があつたからして自然その經略法としては文治的政策が生れ、
道義的方略が考案さるべきであつたのであらうが、それにしても斯く對象地に適應するだけの政策を見誤らないで、
之を表章し得たのは確かに支那經略論のみが誇示し得る大きな特質と云ふべきであらう。而も斯かる文治的政策につ
いて更に興味深い事はこの主義を強く押し進めて行くなれば結局日支提携論に近接して來ると云ふ事である。

思ふに幕末時代には支那經略論と相並んで日支提携論が進行してゐた。すでに云つた如く佐藤信淵の存華挫狄論は
嘉永二年に一種の日支提携論を説いてをり、次で安政元年には眞木和泉守の魁殿物語も日支提携を論ずる所があつ
た。尤も日支提携論の主張は信淵の存華挫狄論以前にその先蹤がないわけではない。肥後熊本藩の儒者平川坦翁は天

保年間に海防策三篇を著し、篇中「日本ノ如キ小國ハ支那朝鮮ノ如キ唇齒ノ國ト交際ヲ親密ニシテ歐米ノ侵略ヲ拒クトキハ彼レ輕侮ヲ逞スルコト能ハズ、却テ我ヲ畏敬スベシ云々」(日本教育史料平川先生履歷)と説いてゐるから、この平川坦翁こそ日支提携論の先驅者と見做すべきであらう。

更に安政四年の頃には京都蓮古堂の學者、巖垣月洲の西征快心篇(杉浦重剛編巖垣月洲所收)は清英兩國の葛藤發生の際、黃華國の副將軍が幕府に請ふて諸藩の壯士を募り、以て清國を援け、英國を征討せん事を物語つてゐるから、これまた日支提携の思想を含めてゐるかと思ふ。なほまた文久三年には平野國臣の制礮礎策が明瞭に日支の提携を説き、又勝海舟が亞細亞各國の合從連衡吏に云へば、日支韓三國の提携を主張した事も想起する必要がある。

斯様にして幕府に於ける對支策論には支那經略論と相並んで日支提携論があつた事は輕々に看過してはならぬ。この兩論は言葉の上では如何にも對立的意味を有つてゐるやうであるけれども、夫々の所論の實際について見れば必ずしも相容れぬ性質のものではないのである。何故なれば、支那經略論と雖も前述の如き文治的或は道義的な精神を強調して、相手を認め、生かして行く時には日支提携論に通ずる道が開かれるからである。佐藤信淵や眞木和泉守が夫々兩論を併せ持つてゐるのはこの點から云つて何等矛盾とすべきではない。而して又森祐信や山田方谷が各々支那に對する大膽な進取經略を説いてはゐるが、その思想の奥底深きところには、日支提携の思想が隱顯してゐる事を否むわけにはゆかない。森祐信の敵屢論を見れば清國と我が國との關係を述べては「隔海接壤猶兄弟之國」と云ひ、又「唇亡齒寒」としてをり、更に我が仁恤の師が清に入つて恩威併び行ひ、人心を收攬した曉には「驅滿清心服之卒、以我

精兵繼之」以て英國の勢力に當らんとも計つてゐる。斯かる斷片的な言葉の裡から一種の纏つた思想を汲み取らうとする事は當を得てゐないかも知れないが、少くとも日支提携思想と相通するものを偲ふことは出来る。同様の意味から山田方谷の安政六年に於ける建白書や、また進督學に與へた手簡は熟讀玩味して、得る所が少くない。即ち之等森祐信、山田方谷の説く所からして支那經略論と日支提携論とは飽迄も對立的でなく、互に融通し合つて行ける事を教へて呉れるものである。幕末の支那經略論が日支提携論と相並び、これに近付き得るものをもつてゐた事はまたこの論自身の特質と云はねばならぬ。

さあれ幕末先覺者の思想は支那經略論と日支提携論との間に彷徨してゐたものと云ふ事が出来る。その彷徨は明治、大正の日本のみならず、昭和の日本もまた歩んでゐる道ではなからうか。支那經略と云ふ形を採り乍らその裡に日支提携にも通じ得る思想を含めてゐた幕末の論は、今日の日本を見る上にも多くの考ふべき點を與へて呉れるやうである。(完)

(附記)

本稿は昭和十三、四の兩年度に互り文部省精神科學獎勵費の交附を受けて研究したものの一部である。その稿の成る、もとより先學諸家の研究に手引を得たところ少くないが、史料の蒐集について直接には第四高等學校長岡上梁先生、大津市膳所小學校長佛性誠太郎氏、森祐信の御孫に當られる兵庫縣芦屋の森理一氏御夫妻、大分縣日出町帆足記念圖書館理事出田新氏より御好意を忝くした。特記して深く謝意を表する次第である。又拙稿を本紙上に載せるについては、昨年度の本紙編集主任柴田實學兄に御約束して置き乍ら、筆者の怠慢の致す所、荏苒今日に及んだが、同學兄に對しこの機會に改めて御詫び申上げたい。(昭和十五年六月八日稿、八月廿日補訂)